

地域に信頼され若者が活躍できる教室作りを目指して

鹿児島大学 消化器・乳腺甲状腺外科 大塚 隆生

令和2年4月に鹿児島大学に赴任して様々な挨拶文や寄稿を書く機会が増えたが、抱負として一貫して書き続けていることは「若者が活躍できる教室作り」である。最近はさらに「地域に信頼され」も付けるようにした。組織の最も重要な役割は人材育成であり、核になる人材を遺しておけば必ず後に繋がっていくはずである。一方、最近の外科は過酷な労働環境に加え、慢性的な人材不足からそのしわ寄せが若手外科医に集まり、それを見た学生や研修医が外科を目指さなくなり、さらに少ない外科医が疲弊するという負のサイクルに入っている。学生や研修医は年代の若い若手医師に近い自分の将来像を重ねるので、若者が活躍できる外科教室を作り、そこに魅力を感じ活躍の場を求める若者が集まる環境を整えていく必要がある。「地域に信頼される」ために必要なことは、質の高い医療を提供することである。これができれば自然と患者さんが集まり、手術件数が増え、そうすれば若者が経験できる手術数が増え、研究に必要な切除検体も増えていき、診療・研究・教育のサイクルが効率よく回るはずである（図1）。そしてこれを見た学生や研修医が憧れを持って外科医を目指して集まってくれることが理想である。このサイクルを回すためには外科だけでなく消化器内科、麻酔科、病理をはじめとする院内各診療科や基礎研究室、さらに地域の先生方の協力が欠かせない。最終的には外科治療に関わる臨床・研究・教育の拠点を形成し、医師、パラメディカル、患者さんの全てが恩恵を受けることができるwin-winの体制を整えていきたいと考えている。

外科も分業化が進み、消化器外科領域でも食道や胃、肝胆膵等の臓器へ特化した専門医制度が整えられてきている。しかし地域では特定の臓器しか診ることができませんでは済

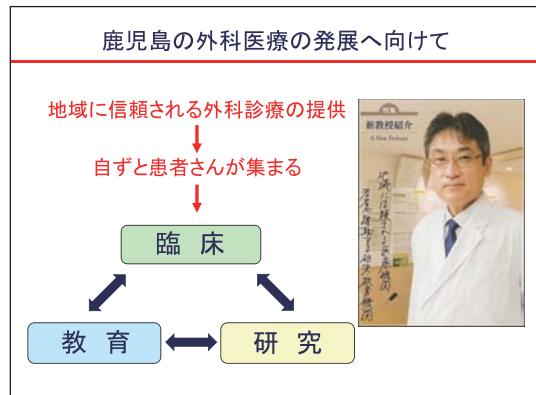


図1 信頼される地域医療と臨床・研究・教育のサイクル（右は桜ヶ丘だよりより）

まされないので、一般外科の素養を十分に身につけておく必要がある。鹿児島でも若者の都市志向、早期の専門医取得希望が増えてきているが、私どもの教室には地域医療を支える最後の砦たる一般外科医を育成する責務もあるので、この点はぶれることなく、「地域に行くこともあるし、一般外科の素養を身に着けたうえでの専門性」を推進していくつもりである。外科関連処置、すなわち緊急対応、中心静脈ルート確保、創傷処置、カテーテル挿入、ガイドワイヤー操作、内視鏡などが得意な者は概して手術も上手いことが多く、特に何でも自分でしなければならない地域でこそこういった技術を身につけることができる所以、若い時期に地域で外科医としての素養を磨いてきて欲しいと思う。

私どもの教室は愛甲 孝先生、夏越祥次先生の時代から臨床と研究のいずれの領域でも全国的に名が通っており、全ての臓器別診療グループもタレント揃いであるため、あまり苦労することなくスタートを切ることができた。高難度手術の大学への集約化は鹿児島でも始まっており、豊富な手術件数にも恵まれているうえに、後輩を指導しようとする気風は私

の前任地である福岡よりもはるかに高い。また内科学教室との連携体制もうまく機能しており、病理学教室には質の高い切除検体が豊富にある。後はこれを利用して大学院生を指導しながら研究業績を上げ、研究費を地道に獲得していくべき。この環境づくりは指導者側の責務であり、特に研究と資金獲得は教室のactivityの指標にもなるので、大学人の義務としてスタッフにも頑張ってもらいたい。

外科には「science (論理)」の部分と「art (感性)」の部分がある。プロ野球選手も全員が一軍選手で活躍できるわけではないのと同じように、外科医もこの感性を磨くかどうかで一流になれるかどうかが分かれて行くようと思う。日々の診療の中で僅かな兆候から異常を読み取る能力、手術中の攻め所や危機回避の判断力と胆力はまさに感性であり、決して人から教えられるだけで身につくものではない。また医学全般に言えることだが、医療は不確実な科学であるため、先人に学びつつ新たな知見を得て日々進歩していくなければならない領域である。すなわち「温故知新」の実践である。さらに奉仕の精神がなければ良い医療は提供できない。外科に限らず医療人として重要な要素に相手を思いやる心、すなわち「惻隱の情」や「恕」も必要である。外科では癌を扱うことが多く、患者さんと家族は人生最大の危機回避を外科医に託すわけであるから、それに応えるだけの人間性も身に付けておかなければならない。論理的ではない部分の「情緒と感性」を豊かにするには仕事以外の自己努力によることが大きい。この「情緒と感性」を磨くためには豊かな自然と文化があるところに身を置き、そして読書をすることであるとベストセラーにもなった「国家の品格」の中で藤原正彦氏は述べている。そして読書をするのであれば前述の「温故知新」を実践する上でも歴史がよいと個人的には考えている。多くの管理者は歴史に学び、座右の書を持っている。仕事とは一見関係のないところから様々にヒントを得ている

わけだが、これは医療でも同様である。幸い鹿児島には豊かな自然と文化があり、ユネスコ世界遺産の文化遺産（反射炉等の幕末・明治維新の産業革命関連事業）と自然遺産（屋久島）のいずれもが揃っている。この二つが揃っているのは日本では東京と鹿児島だけである。こういった地の利も生かして、若者には豊かな「情緒と感性」を身に付けていってもらいたい。

理想的な指導とは適材適所に人を配置して、任せてしまうことだと個人的には考えている。私の場合はなるべく手術には入らず、外から（手術室と繋がっている教授室のテレビモニターから）見守るようにしている。どうしても近くにいると口出ししたくなるからで、本当に困ったときに呼んでもらうようにしている。ただし呼んでも間に合わない事態は避けたいという医療安全上の問題があるので、教授室からのモニターというわけである。私自身もそのように育てていただいた。司馬遼太郎著「坂の上の雲」のクライマックスである日本海海戦では東郷平八郎と秋山真之の活躍によりロシア・バルチック艦隊を撃滅するわけであるが、読み込んでいくと西郷従道、大山 嶽、山本権兵衛の薩摩出身の陸海軍上層部が適材適所に人を配置し、一切任せきったところが見えてくる。欧米の論理に対し日本人は感性で判断することが一般的に多く、薩摩で言うと前者が大久保利通、後者が西郷隆盛になるかと思う。この二人が協力し論理と感性が上手く機能した時に明治維新という大事業を成し遂げることができたわけだが、維新後に離れた二人は論理と感性のバランスを失い、いずれも非業の死を遂げている。西郷従道、大山、山本は感性としての武士道を濃厚に持っていたはずであるが、一方で合理性も持ち合わせていたため西郷・大久保のいずれにも与することなく生き延び、のちに日露戦争での勝利に貢献することができた。ここまでが日本人が世界で尊敬された最後の時代であり、薩摩特有の風土と精神性と無縁ではない。現

在、日本の政治家が世界で尊敬されないのは、昔の日本人なら持っていたはずの矜持と品格を持ち合わせていないからである。若者には、是非郷土の偉人のことをよく知り誇りを持つてもらいたい。郷土への誇りや郷土愛は地域医療を行う上での矜持や情緒に必要な要素である。

夏には若い医局員とその子供達と一緒にカブトムシ・クワガタムシ捕りに出かけた(図2)。当初は私の30年以上前の記憶を頼りに加治木に行く予定にしていたが、自信がなかったため、幼稚園から大学までずっと一緒に過ごした友人に引率を依頼したところ快く引き受けってくれ、皆で入来峠へ向かった。友人は工学部卒で、私の遊びの師匠でもあり、昆虫採集、釣り、麻雀、ゴルフ等なんでも凝る性格である。最近は彼の子供が一緒に虫捕り行ってくれないので一人で行くことが多かったそうで、今回の依頼はまさに渡りに船だったようであるが、幻の深山(ミヤマ) クワガタ10匹をはじめ全家族虫籠が一杯になり、子供達も大喜びであった。友人にどうやってこの穴場を見つけたか事情を聴いてみると、冬場に山を俯瞰して葉が枯れた木(クヌギの葉だけが枯れるらしい)が密生している場所を見つけて覚えておき、夏に安全に辿りつけるところを狙って行っているということであった。当日の現

場では子供達をうまく誘導して、危険な所と安全な所を教えながら、子供達が自分で虫を捕まえることができるよう配慮していた。実はこういった体験は手術にも通じるところがある。すなわち術野全体を俯瞰して危険な所(出血する所)を見極めながら、時に攻め、時に迂回するなど、私自身も野山を駆け巡っていたころの感覚を自然に手術に生かしていくことに最近気付くようになった。また手術指導も友人のようにできればよいなと思った(感じ取れるかどうかは本人次第であるが、場は提供しなければならない)。最近では危険な場所へ子供を近づけない親が増えてきているが、むしろこういったことを経験して乗り越えてこそ修羅場に強い本物の外科医が育つ一面もある。今回参加した子供達から将来の外科医が育ってくれることを期待したい。

30年以上鹿児島を外から見てきて、鹿児島には豊かな自然と文化があり、人材育成に適した場所であることを強く感じていた。臨床、研究、教育の環境と論理的な側面の指導体制を私たちが整えるとして、若者には私たちでは教えることができない情緒と感性をこの地の利を生かして十分に身に付けていってもらいたい、次の世代に伝えていってもらいたいと願っている。



図2 入来峠での一コマ